

# 日本語学習者に対するカタカナ語教育の問題と提案

安 榮 花

## 1 はじめに—カタカナ語教育における現状と問題—

日本社会ではカタカナ語使用頻度が年々高まってきているのに伴い、カタカナ語表記のゆれやカタカナ語の言い換え提案などが唱えられるほど、カタカナ語は注目を浴びている。鳥飼（2007）は、カタカナ語が増える理由について以下のように述べている。「適当な日本語が見つからないなら、そのまま「カタカナ」にしておけば、「外国」がごく自然に「日本」の中に溶け込むわけで、訳出の手間を省く機能を持つ。」たしかに、日本語に訳さないで、そのままカタカナ語にしておけば、本来の英語の意味が変化し、妙にニュアンスが変わってしまうことが防ぐことができる。また、適当なカタカナ語を使うことで「洗練された」雰囲気が出ることは否めない。このように、カタカナ語は、便利な機能を多く持っており、今後も増え続けていくだろうし、より多くの人々に多用されていくことと予想できる。

その一方で、日本語教育でのカタカナ語教育の実態はどうか。筆者の経験では、現代の日本社会におけるカタカナ語への関心の高さは実際の教育に反映されていない気がする。日本語教育でのカタカナ語の導入期間は短く、ひらがなや漢字に比べ重要視されていないと言っても過言ではない。それに加え、日本語学習者にとって、カタカナの習得はひらがなや漢字の習得とは異なる問題がある。その問題とは、多くの日本語学習者が母語以外に英語の学習経験があるということである。すなわち、日本語学習者にとって、英語に由来するカタカナ語の多くは、聞いたこと、あるいは、使ったことがあることばであるという点である。そうは言っても、日本語学習者にとって、カタカナ語は決してわかりやすいものではない。諏訪・西野・小高・小倉（2002）は、「日本語学習者の片仮名語の理解を困難にする一因として、英語起源の片仮名語の音がもとの英語と異なるため、混乱を起こすということがある」と述べている。また、山懸（1999）によれば、「とりわけ英語と日本語では音声的にも音韻面でも大きく異なるため、英語の言葉が日本

語に取り入れられると日本語の制約に合うようにさまざまな調整が行われる」とされている。このように、日本特有な形式のカタカナ語は、英語とは分けて覚える必要があり、逆に言うと、英語の学習経験が日本語学習者のカタカナ語習得の妨げになってしまう可能性もある。

そこで、本研究では、英語を表記したカタカナ語だけを調査する。具体的には学習者の英語の学習経験がカタカナ語の習得にどのような影響を与えているかを調べ、また、日本語学習者にとって習得が困難であるように考えられるカタカナ語の教育を強化し、限られた練習時間の中で、より習得しやすく工夫することを提案する。

## 2 先行研究と卒業論文の位置づけ

中山 (2001) は、「新聞はいわば、その国のその時点における縮図のようなものである。したがって、そこで多用される語は、一般的にその国の社会生活を営む上ではよく使われている語の一部であると考えてよいと思われる。そのような我々日本人が日常よく接する外来語を、日本語学習者が上級教科書まで勉強したら、どの程度身につけられ、また、身につけられないのかを調べることは、効率よく外来語を学ぶための教材作成の第一歩となるのではないかと考える。」と述べている。中山 (2001) の調査結果では、「新聞に多用される357語における割合を見ると、東大コース104語は29.1%、最多コース202語は56.6%、最小コース71語は19.9%、平均126語は35.3%となる。つまり、上級教科書まで学習しても、最多コースでさえ新聞に多用される外来語の2語に1語、平均では3語に1語しか学べないということになる。」と指摘している。また、中山・陳内・桐生・三宅 (2008) では、「多くの機関で、カタカナ文字もカタカナ語もひらがな文字やひらがな語、漢字や漢語とは異なり、あまり時間をかけることなく使用教材に出現したときに教える程度であることがわかった」という報告がなされている。

しかし、陳内 (2008) の調査でわかるように、カタカナ語習得レベルの希望は「新聞やニュースが読める」レベルまで教えてほしいという学習者が最も多かった。日本語を学習している学習者にとって、現在、日本社会における最も新しい情報を提供している新聞やニュースに興味を持っていない学習者は決して多くないはずである。日本語学習者が新聞やニュースが読めるほどカタカナ語を学習したいという希望は当然なことであると言えよう。しかし、日本語学習者の学習第一希望である新聞やニュースが読めることは、上級教科書まで学習しても決して簡単なことではない。むしろ、新聞やニュースのカタカナ語は、上述した結果からもわかるように、日本語学習者の学習経験のないカタカナ語の方が多いはずである。日本語学習者のカタカナ語に対する学習希望と日本語

教育でのカタカナ語の扱われ方には、大きなずれがあることが確認できる。このようなずれが日本語学習者の抱くカタカナ語の苦手意識につながるとも言える。そこで、本調査の調査語としては、新聞で多用されるカタカナ語を中心とし、日本語学習者がどの程度カタカナ語を理解しているかを把握することにした。そして、学習者に共通してみられる間違いに関しては、誤用分析を通し、その理由も明らかにしていきたい。

### 3 アンケートの概要

まず、調査対象について説明する。日本で、日本語を学んでいる中級から上級の日本語学習者を対象とした。初級日本語学習者に関しては、カタカナ語文字の定着が懸念されるので除くことにした。中級者は、日本語学校の中級クラスの58名で、日本語学習年数が1年以下の者に定めた。国籍や母語、日本語学習期間、来日期間、英語学習期間について聞いた。上級者は、日本語学校の上級クラス35名と日本の大学に通っている大学生18名の合計53名を対象とした。<sup>(i)</sup>

調査項目は、大きく4つの項目に分けて調べることにした。まず、英語の表記を示し、それを日本語のカタカナ語で書いてもらう。また、英語の表記の意味がわかれば○をわからなかったら×と書いてもらう。制限時間は5分にした(問1)。次に、事前に録音した日本人のカタカナ語の発音を聞き、カタカナ語で書いてもらう。カタカナ語は2回ずつ聞かせ、問1と同様に、意味がわかれば○をわからなかったら×と書いてもらう(問2)。その後、問1と問2の中でどちらが難しかったのかを聞く質問をする(問3)。最後に自由回答として、普段カタカナ語をどのように覚えているかについて書いてもらう(問4)。

調査語の選択は、英語出自のカタカナ語に限定し、まず、朝日新聞(1911年～2005年)と読売新聞(1932年～2002年)の社説で使われた外来語の高頻度語彙上位25位までのカタカナ語は、全て調査語として選択した。それ以外の調査語は、2005年と2006年に日本語

表1 調査語一覧

中級者用	問1	ケース、コンピューター、グループ、ルール、テスト、サービス、システム、レベル、バス、チーム
	問2	テレビ、クラブ、エイズ、ホーム、センター、イメージ、モデル、ガス、インフレ、テロ
上級者用	問1	データ、バランス、トレーニング、ドル、オープン、ニュース、コントロール、メッセージ、バブル、メーカー
	問2	スタート、アプローチ、パーティー、チェンジ、カレンダー、ハイジャック、ビル、スローガン、プロジェクト、デフレ

能力試験に出題されたカタカナ語から無作為で選んだ。2級のカタカナ語は、中級者用の問題とし、1級のカタカナ語は、上級者用の問題として出題した。それで、最終的に、中級者用と上級者用のそれぞれ20語を調査語として選択した（表1）。

#### 4 アンケートの結果

##### 4.1 問1（英語の表記からカタカナ語への変換）について

問1の正答率は73.9%で、中級者用の72.4%と大きな差はないので、上級者用の回答を見る（表2）。

表2 上級者の問1の回答内訳

データ51	データー 1 デター 1
バランス45	バーランス 3 バランスー 2 無回答 3
トレーニング32	トレーニング 9 トレイニング 6 トレインinger 2 トレニング 1 無回答 5
ドル27	ドール 13 ドルー 4 ダラ 2 ダラー 1 無回答 6
オープン38	オープン 11 オプナー 2 無回答 2
ニュース41	ニュースー 4 ニュウス 2 ニュス 1 ニウス 1 ニュースー 1 無回答 3
コントロール40	コントロールー 3 コントロール 2 コントロル 1 コントローラ 1 無回答 6
メッセージ34	メセージ 9 メッセジ 3 メッセージー 2 メーセイジャー 1 無回答 4
バブル42	バプルー 4 バブール 2 ダブル 1 無回答 4
メーカー 42	メーカ 6 メイカ 3 無回答 2

最も正答率の低かったのは、「ドル」（50.9%）で、正答率が全体の平均よりかなりと低い。「ドール」と書いた誤答が最も多く（13件）、その次に多かった誤答は、「ドルー」（4件）だった。韓国母語者の場合、特に目立った誤答は、「ダラ」と「ダラー」であった。「ダラ」と「ダラー」と答えたのは、全て韓国母語話者であり、中国母語学者からは、1件もこのような誤用は見られなかった。韓国語の「ドル」は、「달러」と発音し、カタカナ語に直すと「ダラ」か「ダラー」に近い音になる。韓国母語学習の母語干渉による誤用であると考えられる。全体を通して、母語干渉による誤用はあまり見られなかったものの、「ドル」に関しては、「ダラ」という韓国母語学者のみの誤用が見られたのは、「ドル」の学習経験がないことであるだろうか。もしくは、「ドル」の学習経験があるとしたら、「ダ」が「ド」と発音されることに対する韓国母語話者の感じる違和感からの誤用であるかもしれない。このように、カタカナ語の表記におけるさまざまな調整についての学習者の理解が不足していることがわかる。

一方、「メーカー」も英語の発音に近いカタカナ語に置き代えると「メイカ」に近い音になる。しかし、中国母語話者の回答にも「メイカ」（1件）があったので、韓国母語話者の母語干渉による誤用であるとは考えにくい。母語干渉による誤用であるというより、英語の学習経験から英語に近い発音を書いたものであると考えられる。また、「データ」の場合は、「デイタ」という誤用は一件も見られなかった。このことは、「データ」というカタカナ語の定着が順調に行われ、母語の干渉を受けるほどの日本語学習者の迷いが生じなかったということであるだろう。

「ドル」の次に誤用の多かったのは、「トレーニング」である。「トレーニング」が9件と最も多かった。上級者用の回答でも中級者用と同様に、最も多かった誤用は、長音の挿入によるのが34件で、その次が長音脱落の31件だった。カタカナ語長音とは、日本語学習者にとって、最も注意すべきことであることは間違いない。

「トレーニング」の次に誤用の多かったカタカナ語は、「メッセージ」である。その中でも、「メセージ」（9件）と促音の脱落が最も多く見られた。諏訪・西野・小高・小倉（2002）によれば、「促音は、英語を片仮名で表記する場合、日本語としての語調の問題で、日本語学習者には、促音が入るか入らないかの区別が難しい場合がある」と述べている。このように、カタカナ語の促音と長音の存在は、日本語学習者のカタカナ語に対する苦手意識を持たせる最も大きい原因であると考えられる。

#### 4.2 問2（日本人が読み上げたカタカナ語の書き取り）について

問2は中級者用の問1（72.4%）に比べ、上級者用の正答率は73.4%と少し高い。しかし、正解率より目立つのは、上級者のほうが無回答の数が断然少ないということだ。そこで、ここでは中級者用の回答を見る（表3）。中級者用の問1では、無回答が44件もあったのに対し、問2の場合は、17件と半分以上も少ない。しかし、カタカナ語の意味がわかるかという質問に関しては、意味がわからないという回答が、問2は61件もあるのに対し、問1は7件しかない。このことは、カタカナ語の発音が聞こえることで、意味がわからないカタカナ語で間違っても、書けるという自信の表れであろう。また、日本語学習者は、カタカナ語を聞いてカタカナ語で書くことより、英語の表記をカタカナ語に直し、カタカナ語で書くことに、ストレスや不安を感じているように考えられる。

中級者用で、正答が最も少ないのは、「センター」で、「センタ」と長音脱落による誤りが20件もある。全ての調査語の中でも、正答率が最も低い。誤答の中には、「センター」「せんぱー」とひらがなの「せ」を書いた回答が2件あった。調査全体として、カタカナ語文字の間違いによる誤答は、「ワラブ」（1件）、「がス」（1件）「レべる」（1件）で、

表3 中級者の問2の回答内訳

テレビ57	テレビー 1
クラブ44	クラブ7 クラプー 3 クラブ 2 ワラプ 1 無回答 2
エイズ45	エイズー 5 エーイズ 3 エイス 1 ペイス 1 無回答 3
ホーム53	ホム 2 ホームー 1 無回答 2
センター 21	センタ20 センダ 8 センダー 2 センパ2 センテア 1 シンタ 1 センター 1 センパー 1 無回答 1
イメージ54	イメージ 2 無回答 2
モデル55	モデルー 2 無回答 1
ガス36	ガスー 9 ガース 5 カス 3 ガッシュー 1 がス 1 無回答 3
インフレ31	インフレー 19 インフーレ 3 インプレ 1 インフレー 1 インブル 1 プル 1 無回答 1
テロ30	テロー 18 テロー 8 無回答 2

全部5件あった。誤答として数えてはいないが、「ソ」と「ン」や「ツ」「シ」を書き間違ったのは、中級者と上級者を合わせると16件もある。中山・陳内・桐生・三宅（2008）によると、「多くの機関で、カタカナ文字もカタカナ語もひらがな文字やひらがな語、漢字や漢語とは異なり、あまり時間をかけることなく使用教材に出現したときに教える程度であることがわかった」という報告がなされている。また、馬瀬・中東（1998）によれば、「インフォーマントの中には、カタカナの習得が十分でなかったために回答をすべてひらがなで書いた者、あるいは時々ハングル交じりで書いた者がいた。これはひらがなを習得した後、カタカナを導入することが原因であろうが、これも外来語を難しいと学習者に感じさせる一要因になっていると考えられる」という指摘もある。本調査の結果でも、中級以上の日本語学習者であっても、カタカナ語の文字の定着が完璧に進んでいるとは考えにくい。

「センター」の次に正答が少なかったのは、「インフレ」と「テロ」の順である。「インフレー」「テロー」と書いた誤答が多く、ここでも長音挿入による誤用が多く見られた。山懸（1999）は、促音化や長音化に対し、「英語の単語をカタカナで表す際、何らかの形で音節の重さに調整の必要を感じていることや単語のストレスが一部の学生によって母音の長さという形で表されたのだという見方も可能である」と述べている。本調査の問4のカタカナ語をどのように覚えているかについての質問では、中級者の場合、長音を注意しながら勉強しているという答えが最も多かった。カタカナ語の長音のことを気にしすぎたために、つい書いてしまうことも長音挿入の原因の一つであると考えられる。長音による誤用に関しては、様々な原因が存在しており、多くの見方が可能であると考

えられる。

また、「インフレ」の正答者も意味がわからなかったという回答は5件あった。「インフレ」が「インフレーション」の略語であることがわからなかったことが原因であろうか。調査語の中に略語は、「インフレ」と「デフレ」のみだが、この二つの略語は、全体の調査を通し、誤答が多かった順にすると、「インフレ」が5位、「デフレ」が8位である。このように、日本語学習者は、略語を苦手としていることがわかる。また、「デフレ」の場合も「インフレ」と同様に、正答者の中に意味がわからなかったという答えは、7件もあった。このことは、日本語学習者の略語の意味について学習が不足していることを示し、カタカナ語の略語が、何を略したことばであるかについての日本語教育現場での教育の必要があるということを物語っている。

### 4.3 問3（問1と問2の難易度の違い）について

#### 4.3.1 中級者用の回答

まず、中級者用の結果から見てみよう。

表4 中級者の問3の回答内訳

問1	問2	どちらも簡単だった	どちらも難しかった	無回答
15名	13名	13名	9名	8名

中級者は、問1が難しかったと答えたが最も多い。問1と問2の正答率の結果を見ても、問2の73.4%に比べ、問1が72.4%でわずかに低いことがわかる。日本語学習者に、なぜ、問1の方が難しかったかについて聞くと、「問2は、カタカナ語の発音が聞けるので、長音はどこに入るか予想しやすかった。」との答えだった。調査の全体において、長音による誤答が最も多かった。しかし、問2のカタカナ語の発音を聞いて、カタカナ語で書く問題の方が長音による誤用は107件と問1の長音による誤用の63件より圧倒的に多い。カタカナ語の発音を聞いて、長音を区別することが日本語学習者にとって、いかに難しいことであるかが簡単に予想できる。そして、カタカナ語の発音が聞けることで、日本語学習者は、長音の区別ができるという安心感は得られるかもしれないが、実際に、その長音の発音は区別されていないことになる。このことは、カタカナ語の覚え方として、長音を聞き取ることで、覚えようとしても限界があるということを示している。

一方で、問2が難しかったと答えた日本語学習者にも、なぜ問2の方が難しかったかについて聞いてみた。「問1の英語の表記をみれば、どのカタカナ語であるかすぐ予想

できるが、問2は、英語の表記がないので、どのカタカナ語を言っているか発音だけでは区別しにくい。」「普段、英語の表記からカタカナ語に直す練習をしているので、問1の方が簡単だった。」ということだった。英語の学習経験を活かし、カタカナ語を覚えようとしていることがわかる。ここで注目したいのは、問2が難しかったと回答した人の方が、正答の数は少なかったということだ。前述のように、英語の言葉が日本語に取り入れられるときには、日本語の制約に合うようにさまざまな調整が行われているが、その調整を中級の段階で、全部理解させようとしても無理がある。仮に、英語を日本語の制約に合うようになされるさまざまな調整の全てを理解させたとしても、カタカナ語には例外が多く存在しており、間違いが起こり得ることは否めない。

このように、英語の学習経験を活かしたカタカナ語の覚え方には限界がある。このような覚え方を否定するわけでもないし、英語の学習経験がカタカナ語の学習の参考になることは間違いない。しかし、ここで言いたいのは、英語の学習経験を活かした学習方法には、カタカナ語に存在する日本語学習者の迷いの原因となるさまざまな制約があることを理解し、それについても学習の必要があるということだ。このことは、カタカナ語表記に関し、十分な知識を持っている日本語教師による直接の指導の方が、日本語学習者の理解に効果的であると考えられる。また、日本語教育現場では、カタカナ語とは、英語をただ日本語に直したのではなく、日本特有な形にした日本語であることを理解させることに努めるべきであることを強調したい。

#### 4.3.2 上級者用の回答

次に上級者用の回答を見る。回答の中で、最も多かったのは「問2が難しかった」という回答だった。確かに、問2の正答率(72.5%)は、問1(73.9%)に比べ、少し低い。また、調査語のレベルによる影響もあると考えられる。上級者用の調査語を正答率の低い順にすると、「ドル」「スローガン」「ハイジャック」「トレーニング」「チェンジ」「プロジェクト」の順になるが、「ドル」と「トレーニング」以外は、問2の調査語であることが影響しているだろう。

表5 上級者用の問3の回答内訳

問1	問2	どちらも簡単だった	どちらも難しかった	無回答
14名	21名	6名	8名	4名

上級者の結果で注目したいのは、「どちらも簡単だった」という回答が、中級者より

顕著に少ないということだ。中級者よりも日本語学習期間が長い上級者ではあるが、本調査では、中級者の方が「どちらも簡単だった」という回答が多い。このことは、カタカナ語に関して、上級者の方が中級者よりも自信を持っていないことを示しているのだろう。

問1と問2の上級者と中級者の正答率を比較した結果からも確認できるように、日本語学習の全体のレベルが上がると共に、カタカナ語の理解のレベルも上がるとは限らない。むしろ、カタカナ語に対し、自信を失ってしまうことや苦手意識が抱いてしまうことも考えられるのである。このように、必ずしも日本語能力とカタカナ語に関する自信や理解は共に成長するものではないので、上級以上の日本語学習者にもカタカナ語の学習は続けて行う必要がある。

#### 4.4 問4（カタカナ語の学習方法）について

調査の最後に、「普段、どのようにカタカナ語の学習をしているか」について質問した。中級者と上級者の回答を合わせ、最も多かった回答は「カタカナ語だけの学習は普段あまりしていない。」「特に、カタカナ語だけの学習はやっていない。」(19件)という回答だった。これらは、日本語学習者が普段カタカナ語を中心に勉強していないことを示している。確かに、日本語学習者にとって、カタカナ語以外にも学習しなければいけないことは数多くあると考えられる。しかし、この結果は日本語教育現場で、カタカナ語が重要視されていないことも意味している。日本語学習者は、重要視されていることから優先的に学習していき、その優先順位からカタカナ語の学習は遠ざかっているのだと考えられる。また、日本語学習者自身がカタカナ語の学習の必要性を感じていないと言えるかもしれない。日本語教育におけるカタカナ語教育の問題の原点に関わる発言であるとも考えられよう。

次に多かったのは「特に、長音に注意しながら勉強している。」(16件)との答えである。長音の存在は、日本語学習者にとって、最も注意すべきものでもあり、カタカナ語を難しいものにしてしまう大きな原因でもあることが確認できる。

その次に多かった回答は、「看板やメニューを見ながら勉強している。」(7件)など、日常生活において、目につくカタカナ語を勉強しているという答えだった。しかし、この回答の中にも、「特にカタカナ語だけの勉強はしていないが」ということばが詰ったものがあつた。カタカナ語の学習が不足していることの深刻さを改めて感じる。

本調査は、新聞に多用されるカタカナ語を中心とした調査である。しかし、調査対象の111人全ての回答を通し、新聞を見ながらカタカナ語を勉強していると答えた人は、一

人もいなかった。陳内(2008)の調査では、カタカナ語習得レベルの希望は「新聞やニュースが読める」レベルまで教えて欲しいという学習者が最も多かったが、本調査の結果では、このような新聞やニュースを利用した学習方法を言及した回答は1件も見当たらなかった。新聞やニュースが読めるまで学習して欲しいのに、普段、新聞やニュースを見ながら学習していると回答した日本語学習者はいなかったことは、日本語学習者の希望と実際の学習方法は矛盾しているとも感じられる。普段、新聞やニュースを見ながら、日本語学習を行っている学習者は当然いるとは考えられるが、それがカタカナ語の学習でないかもしれないということが問題である。

最後に、中級者の回答の中で、カタカナ語の必要性に関する回答があり、それについて述べたい。「なぜ、英語をわざわざ日本語のカタカナ語として表現しようとするのか理解に苦しむ。日本語に直した方が便利だと思う」という回答だった。この日本語学習者は、韓国語母語者で、日本語学習期間は5ヶ月である。韓国にも、多くの外来語が存在するし、多くの人々に使われている。母語であれば、外来語の使用は、決して難しいものではない。むしろ、便利であると考えられるかもしれない。しかし、多くの日本語学習者にとって、カタカナ語とは、日本語でも英語でもない中間的なものであるため、カタカナ語がややこしく複雑な存在になってしまうのではないだろうか。英語の学習経験からカタカナ語の多くは、聞いたことあるいは、使ったことがあるにもかかわらず、日本語のカタカナ語となると、その便利さまでも否定されるほどの理解に苦しむ存在になってしまうことが残念に思われて仕方がない。カタカナ語表記について、日本語学習者の理解が必要であることは言うまでもない。カタカナ語の表記についての理解があれば、カタカナ語の便利さや機能が否定されることはないだろう。そのためには、日本語学習者がカタカナ語の表記について理解できるように、日本語教育現場での努力がより必要であると筆者は考える。

## 5 おわりに

以上の調査結果から、以下の8点が読み取れる。

- ① 誤答の中では、長音による誤用が最も多い。
- ② カタカナ語の定着には、日本語学習期間より滞日期間のほうが強く関係している。
- ③ 日常生活における出現頻度が低いと考えられるカタカナ語の正答率は低い。
- ④ カタカナ語の意味はそのカタカナ語の表記が原語の発音の近いほど明確である。
- ⑤ カタカナ語の発音を聞き、カタカナ語で書く(問2)ほうが、英語の表記を見てカタカナ語を書く(問1)より無回答が少ない。

- ⑥ カタカナ語の聞き取り能力（問2）は、レベルが上がるにつれ必ずしも伸びるものとは考えにくい。また日本語能力が上がることでカタカナ語に関する自信や理解も必ずしも深まるものではない。
- ⑦ 母語干渉による誤用より、英語の学習経験から共通した誤用のほうが多く見られる。
- ⑧ 英語の学習経験を生かし、カタカナ語を覚えようとする学習方法には限界がある。

以上のように、日本社会におけるカタカナ語の扱われ方は日本語教育現場や日本語学習者における扱われ方と大きなずれがあることがわかった。調査結果からは、多くの日本語学習者がカタカナ語に関して不安や混乱を抱いていることも容易に想像できる。このような学習者のカタカナ語に関する不安や混乱は、カタカナ語の学習が不足していることを示している。日本語学習者からは、普段、カタカナ語の学習をしていないとしても、アンケート後、わからなかったカタカナ語について辞書で調べることや日本語教師に質問をするなど積極的な姿が見られ、カタカナ語に関する学習要望は十分に感じ取れた。それにもかかわらず、カタカナ語に関する知識や理解の少なく、依然としてカタカナ語教育が日本語教育現場において重要視されていないという事実があり、残念に思う。

カタカナ語教育における根本的な問題とも言えるカタカナ語に対する日本語学習者自身の認識の問題や日本語教育においてカタカナ語の扱われ方には、多くの課題が残っているが、今後、さらなる研究により、カタカナ語教育の重要性が再検討され、多くの日本語学習者が抱いているカタカナ語の不明確さからくる不安や混乱が少しでも解消されるべきである。

## 謝辞

アンケート調査にご協力いただいた都内X日本語学校の先生方および日本語学習者の方々、アンケート後のインタビューに応じてくださった崔ユリ氏、李慶欽氏、金ハンビョル氏、また、中国語母語話者について多大の助言をくださった李英春氏に心から感謝申し上げます。

## 注

- i 中級は中国語母語話者27名、韓国語母語話者32名、上級は中国語母語話者21名、韓国語母語話者32名であった。

## 参考文献

- (1) 池田真弓 (2008) 「カタカナ表記における促音挿入—英語母語学習者の場合—」『外国語として

- の日本語教育—多角的視野に基づく試み—』畑佐由紀子編2008年5月30日 くろしお出版
- (2) 財団法人 日本国際教育支援協会『平成18年度日本語能力試験試験問題と正解』
  - (3) 財団法人 日本国際教育支援協会『平成19年度日本語能力試験試験問題と正解』
  - (4) 諏訪いずみ・西野順二・小高知宏・小倉久和(2002)「日本語学習者のためのローマ字表記に基づいた片仮名語からの英単語検索の試み」『電子情報通信学会論文誌』
  - (5) 陳内正敬(2008)「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教」『言語と文化』関西学院大学言語教育センター
  - (6) 鳥飼玖美子(2007)「カタカナ語に見る意味のずれ」『月刊言語』2007年6月
  - (7) 中山恵利子(2001)「日本語教科書の外来語と新聞の外来語」『日本語教育』109号 日本語教育学会
  - (8) 中山恵利子・陳内正敬・桐生りか・三宅直子(2008)「日本語教育におけるカタカナ語教育の扱われ方」『日本語教育』138号 日本語教育学会
  - (9) 橋本和佳「外来語の通時的推移—新聞社説を素材として」『月刊言語』2007年6月
  - (10) 馬瀬良雄・中東靖恵(1998)「日本語教育における外来語表記の諸問題—韓国語母語話者の日本語学習者の場合—」『フェリス女学院大学文学部紀要』
  - (11) 山懸亜矢子(1999)「英語を母語とする日本語学習者によるカタカナ語表記の習得に関する調査」『言語学と日本語教育』くろしお出版

(2009年 卒業)